

伝統をつむぐ ― 赤穂緞通織り ―

それは中国の荘厳な毛織物のようでもあり、ペルシアの市場を舞う不思議なじゅうたんのようでもあった。独特の文様の織物。よく見ると、その文様を際立たせるためか、表面が念入りに摘み込まれて仕上がっている。

赤穂で伝えられているこの織物は、「緞通」という一般には聞きなれない工芸品だ。

江戸時代末、児島なかという赤穂の女性が中国緞通の美しさに魅せられて作ったのが始まりだといわれる。もちろん作り方を教えてくれる人はいない。彼女は端布をほぐし、織り方も、道具も独自に工夫した。そしてできた座布団程度の大きさのものが、赤穂緞通の原点だった。

その後、試行錯誤を繰り返し、ようやく二十六年後に、児島なかの緞通の美しさへの追求と努力が実り、商品として売り出すことができるようになった。当時、赤穂の産業の中心だった塩田で働く多くの女性の副業として、緞通織りは生活を支える糧にもなった。時代は明治に移り、緞通はますます盛んになり、品質も驚くほどに向上した。

明治時代の末期から大正時代にかけては、海外へも輸出され、赤穂の誇るべき工芸品として最盛期を迎えた。京都八坂神社の祇園祭では、山鉾の屏風飾りにも使われた。このように、赤穂緞通は立派な工芸品として、世の中に広く認知されていた。

しかしその後の不況や戦争、そして戦後の綿糸事情の悪化に加え、機械生産技術の発達など、緞通織りをとりまく環境は厳しくなっていた。手間のかかる手作業が赤穂緞通の特徴ではあったが、その効率の悪さもあり、次第に織る女性が減っていく。緞通織りは衰退し、昭和の時代から平成の世になるころには、地元赤穂でも知る人が少なくなり、その技術を伝える人は数人だけになっていた。だれも顧みることがなかったら、おそらく赤穂緞通織りの技術は、いずれ永遠に途絶える運命だったろう。

パチ、パチ、パチ。

織物の表面にはさみを入れていくと、鮮やかに文様が浮かび上がってくる。

「これが赤穂の緞通……。」

井関京子さんは思わず息をのんだ。

赤穂緞通の最後の織り手といわれる阪口キリエさんのことを偶然知り、一九九〇（平成二）年にその小さな作業所を初めて訪れた時のことだ。

その時、阪口さんは言った。

「伝統技術を持つ一人といっても、いつの間にか私一人になってしまった感じです。一年に一枚でも、と頼まれて織っているうちに、ここまで来たように思います。」

井関さんは、「こんな美しいものを織ってみたい」という気持ちが湧き上がってきた。

翌年、郷土の工芸品が消えていくことを憂えた赤穂市教育委員会が「緞通織りを過去のものにしてはいけない」と阪口さんを講師に迎えて講習会を企画し、参加者を募集した。

驚くことに百五十名を超える応募者があり、その後抽選で受講生を二十二人に絞った。その中に井関さんもいた。

その講習会は週に一回、年間五十回。そのうち四十八回以上の出席を要するという厳しいものであった。

講習会は水曜コース、土曜コースの二コースに分かれて行われた。

「私が織るので見ていてください。」

井関さんたち受講生は、交代で、阪口さんの手元を食い入るように見つめた。

織機に張った縦糸に横糸を通し、さらに文様に合わせた色糸を縦糸に結びつけていく。一日わずか二、三センチほどしか織れないという気の遠くなるような作業だ。

「さあ、皆さんやってみましょう。」

阪口さんは、はりのある声で受講生を促した。

講習が始まった時、織機は一台しかなかった。受講生は二人一組になり、一台の織機を交代しながら織っていく。井関さんは必死で阪口さんの織り方を見たつもりだったが、うまくいかない。受講生が少し織ると、阪口さんがはさみで仕上げをする。その手元を一生懸命に見る。そしてまた織る。そんな繰り返しが一年半続いた。そして、ようやく「摘む」段階に進んだのだった。作業工程のうちで、最も難しいのが「摘む」という作業だ。握りばさみで絵図柄を刈り、表面をならしていく。はさみを入れるのは勇気がいる。

最初は手が震えた。

「パチッ。」

と、音がするたびにドキンとした。どの作業よりも気持ちを集中させてやったのになかなか表面がそろわない。

受講生たちは、

「これぐらいでいいのかしら。」

「いや、もう少し摘むほうが……。」

と、互いに励まし合いながらはさみを動かしたが、なかなかきれいに摘むことができない。受講生の摘んだ不ぞろいのものを前にして、

「では、仕上げをしてみましょうか。」

阪口さんは、握りばさみですばやく摘んでいく。そして、見事な出来栄えに仕上げていく。受講生にはその作業を見せるだけで、言葉で教えることはほとんどない。

井関さんは、阪口さんの仕上げを見るたびに、

「まだまだだなあ。自分でもこんなところまで、できるようになるのかしら……。」
と、ため息をついた。

ある時、阪口さんは仕上げのはさみを入れながら、優しいながらも力強い口調で言った。

「緞通の技術は、こうしなさい、ああしなさいと教えるものではないんです。体で覚えていくものなのです。私ができるのは後押しするだけです。大事なことは、その人がどれだけ時間をかけて打ち込んだかということです。」

井関さんは、自分に向かって言われたような気がした。

畳一畳の赤穂緞通を織り上げるのに一年はかかるという。その緞通を毎日毎日何十年と織り続ける阪口さんの言葉は、井関さんの胸にずしんと響いた。井関さんは、そっと阪口さんの顔を見た。穏やかな表情の中にも、緞通場をやめて講習に専念し、後継者を育てようとする阪口さんの意志が感じられる。

井関さんは改めてはさみを握り直し、一心に緞通に向き合った。

二年目に織機は三台、三年目には四台となり、受講生たちが織機に触れる時間はぐんと増えた。やがて、少し織れるようになった受講生たちは、

「どうすればもっときれいな緞通が織れるようになるかしら。」

と、楽しげに話をするようになった。

そして、そのころから、だれが言うともなく、

「でも、これを伝えていかなくてはね。」

というような話がたびたび出るようになった。

一九九六（平成八）年、井関さんたち一期生は長い五年間の講習を終えた。

「私たちが続けなくては。講習を受けたんだから。」

一期生たちの赤穂緞通織り伝承への熱い思いは、ますます高まっていた。

一九九九（平成十一）年、一・二期生を中心とした二十数人が「赤穂緞通を伝承する会」を結成した。

まず、機織り場の確保や織機・握りばさみなどの道具をそろえた。さらに市内の家庭を回って古い作品を見せてもらい、方眼紙に色を塗って、絵柄やデザインを図面にした。そして難しいとされるはさみでの「摘み」の技術の向上に積極的に取り組んだ。

やがて十年近くがたち、三期生も講習を終えた。しかし、なかなか次の担い手が広がっていない。

そんな時、井関さんは阪口さんが話してくれた言葉を思い出す。

「赤穂の緞通がほしい、赤穂の緞通でないと、と言ってくださる方がいる限り、やはり少しずつでも織っていかないと。」

さらに、阪口さんは言っていた。

「練習用に織るものではないですよ。機に向かう時はいつも本番。売り物だという気持ちで織れば心のもち方も違ってくるものです。」

阪口さんの言葉を思い出していると、井関さんは心の中の焦りが静まるのだった。

阪口さんが言った忘れられない言葉がある。

「あと、もう一枚、はいで。」

あの時はわからなかった。いつしか十年以上織るようになって、やっとわかるような気がしている井関さんだった。

型通りのものをつくっているのに、織り手一人一人の個性が出る。それが手作りの良さかも知れない。手間がかかり、簡単には仕上がらない赤穂緞通。だからこそ人の心をとらえることができるのだと、井関さんたちは信じている。

ガタン、ガタン。パチ、パチ、パチ。

今日も機織りとはさみで刈り込む音が工房から響いてくる。

「赤穂緞通を伝承する会」は、伝統工芸の保存や技術の伝承ばかりでなく、地場産業としての復活に向けても動き始めた。

赤穂緞通は、もともと女性の副業として発展してきた工芸品だった。「伝統」であると同時に「産業」として継承されてきたものである。観光で訪れた人の見学や体験を受け入れるほか、さまざまな展示会にも出品し、販売も行っている。

赤穂市では、「赤穂緞通を伝承する会」以外にも多くのグループが活動し、それぞれが引き継いだ技術の完成度をより高め、赤穂の地に伝えていこうと、日々機に向かっていく。

その技術が永遠に途絶える危機を救った人たちがいる。
熱意ある人たちの取り組みは、今も続く。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。